

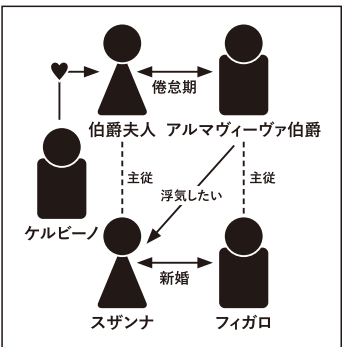
1

モーツァルト『フィガロの結婚』

(1786年初演)

——伯爵の浮気を懲らしめるドタバタ恋愛模様

- ❖ 原作 ポーマルシェの戯曲『狂乱の一日、またはフィガロの結婚』
- ❖ 台本 ロレンツォ・ダ・ポンテ
- ❖ 歴史ポイント フランス革命前夜に作られたオペラ



- ❖ 主な登場人物
- アルマヴィーヴァ伯爵 (Br)
- 伯爵夫人ロジーナ (S)
- フィガロ (Br) アルマヴィーヴァ伯爵の家来
- スザンナ (S) 『セビリアの理髪師』では床屋をしていた伯爵夫人の小間使い。フィガロと結婚予定
- ケルビーノ (MS) 伯爵の小姓

❖ 作曲家 モーツァルト (1756〜1791)

幼少期から音楽の英才教育を受け、神童の名をほしいままにしていたモーツァルト。ザルツブルクでの宮廷音楽家としての時期を経て、1781年にウィーンに移り住むと本格的にフリーランスでの活動を開始します。『フィガロの結婚』の初演時、モーツァルトは30歳でした。台本作家ダ・ポンテと組んだ最初の作品である『フィガロ』はプラハで大ヒットとなり、この成功が次作『ドン・ジョヴァンニ』の依頼へとつながりました。

ストーリー (あらすじ)

第1幕 18世紀半ばのスペイン、アルマヴィーヴァ伯爵邸の一室

アルマヴィーヴァ伯爵の家来フィガロ、そして伯爵夫人の小間使いスザンナの幸せな二重唱でオペラは幕を開けます。彼らは、今日結婚式を挙げる予定なのです。フィガロは物差しを持ち、まだ家具の置かれていない部屋の寸法を測っています。伯爵が2人に与えてくれた新しい部屋は、伯爵の自室に近く、屋敷の中でこれほど

便利な場所はないとフィガロは大喜び。しかしスザンナは、伯爵がこの部屋を賜った真意に気づいており、手放しでは喜べない様子です。

「旦那様は近頃奥様に飽きていて、別の女に手を出そうとしているの。この屋敷の中で誰にもバレずに浮気するには、狙った女を自分の近くの部屋に住まわせるのが一番でしょ？ ターゲットにされているのは、ほかでもない私なのよ」

いくら主君とはいえ、自分の妻に手を出すなど言語道断。憤慨したフィガロは伯爵に一泡吹かせるための作戦を立てるのでした。

当のアルマヴィーヴァ伯爵ですが、自分以外のプレイボーイには我慢がなりません。さしあたり警戒しているのは小姓のケルビーノです。ケルビーノはまだ10代前半の少年ですが、伯爵夫人のことを熱っぽく慕っていて、スザンナとも仲が良いのです。伯爵は、ケルビーノが同年代の少女と屋敷の中で隠れて会っている現場を目ざとく見つけ、それを口実に罰を与えることにしました。彼を連隊の士官に任じ、即刻入隊を命じたのです。

愛らしい容姿で、屋敷の女性陣にちやほやされながら浮ついた生活を送っていたケルビーノはその辞令に愕然。フィガロはケルビーノの士官就任を大げさに祝い、握手をせがみます。

「羽飾りのついた帽子はもう許されないぞ、ケルビーノ。これからは鉄の兜か、でかいターバンをつけないとな！」

意気消沈のケルビーノに近づいたフィガロはこう耳打ちしました。

「出発する前に、君に話したいことがあるんだ」

フィガロは伯爵をこらしめるため、ケルビーノの力を借りたかったです。

第2幕 伯爵夫人の部屋

伯爵夫人であるロジーナは、夫の愛が冷めたことを嘆いています。スザンナが伯爵夫人を慰めていると、フィガロがとっておきの作戦を携えてやってきました。

「まずはスザンナ、君は伯爵の誘惑に乗ったふりをして、今日の夕方に庭で会いたいと伝えるんだ。そして待ち合わせ場所には、女装したケルビーノを向かわせる。その現場を奥様が押さえれば、旦那様ももう浮気しようとは思わないだろう」

この作戦は実行に移され、スザンナと伯爵夫人はケルビーノを奥の間に呼んで女装させます。ボンネットをかぶり、女性らしい歩き方を叩き込まれたケルビーノは今や文句なしの美少女に変身しました。



聴きどころ

序曲

モーツァルトの序曲の中で最も有名な、単独で演奏されることも多い楽曲です。期待感を抱かせるざわめきのような弱音の冒頭部から、突如すべての管弦楽によって幕開けにふさわしい華やかな旋律が奏でられます。本編の目まぐるしい展開を予感させる快活な序曲です。

「もう飛ぶまいぞこの蝶々」

第1幕のフィガロのアリアです。士官として連隊に出向くことになったケルビーノをからかって歌い、終盤は行進曲風に。翌年初演の『ドン・ジョヴァンニ』では、晩餐の場面で楽隊によって演奏され、ジョヴァンニの従者レポレッロが「この曲は知っている」と発言します。

「恋とはどんなものかしら」

テレビなどで流れることも多い、第2幕のケルビーノのアリア。スザンナにギターで伴奏してもらいながら、自作の詩を伯爵夫人に披露する場面です。ケルビーノは男の子ですが、メゾソプラノの女性によって演じられる「ズボン役」という役柄です。

「手紙の二重唱」

第3幕で伯爵夫人とスザンナによって歌われる優雅な二重唱。伯爵を庭に誘い出す手紙の文句を伯爵夫人が考えて口述し、スザンナに書き取らせませす。

映画『ショーシャンクの空に』でも使用されています。作中でこの曲を初めて聴いた登場人物は二重唱の美しさに感動しつつ、「歌詞の意味は分からないし、知りたいとも思わない。知らないほうがいいこともある。心が痛むほどに美しい内容を歌っていたと思いたい」と独白します。伯爵をこらしめるため偽りの手紙を書く二重唱だと知っていると、にやりとさせられるシーンです。

◆CD・DVD

ドイツを代表するバリトンのヘルマン・プライと、オペラ界で最も有名なソプラノの一人キリ・テ・カナワが主演を務めるポネル出版は、伝説的な名盤（1976年制作）。豪華かつスタイリッシュな舞台が胸躍るマクヴィカー出版（2006年収録）もおすすめです。



聴きどころ

ウィリアム・テル序曲

テレビ番組のテーマ曲や、運動会の定番曲として用いられてきた、日本人にとって最も馴染み深いクラシック曲の一つです。この序曲は12分におよび、「夜明け」「嵐」「静けさ」「スイス軍の行進」の四つの部分で構成されています。特に有名なのは、ラスト4分弱で演奏される「スイス軍の行進」の部分です。

テルがリンゴを射抜く場面

息子の頭の上に乗せられたリンゴをテルが射抜くシーンは、伝説の中で最も有名です。原作の戯曲では、ジェスレルが「80歩離れた距離から当てろ」と命令しています。

テルはこの挑戦の前に、チェロの切ない対旋律が印象的な短いアリア「じつと動くな」を息子のジェミに向けて歌います。射抜かれたリンゴが割れる演出に趣向が凝らされる、注目の場面です。



STORIA DELL' OPERA

オペラにまつわる歴史

オペラでその名が登場するハプスブルク家は、スイス北東部を発祥とする地方貴族です。ハプスブルク家の実質的な初代・ルドルフ1世が、1273年に神聖ローマ皇帝に選出されたことが彼らの繁栄の始まりで、その後ヨーロッパ屈指の有力貴族にまで上り詰めます。ルドルフ1世が1278年にオーストリアの領土を獲得すると、ウィーンを拠点として勢力の拡大を図りました。

当時のスイスは神聖ローマ帝国に属していましたが、ハプスブルク家がスイスの人々に税金を課し、代官を置いて支配することに対して反発します。もとより自治権を与えられていたシュヴァイツ、ウーリ、ウンターヴァルデンの3州の代表者は、1291年8月にリュトリで会合し、ハプスブルク家に対する共同防衛のための同盟を結びました。8月1日がスイスの建国記念日とされているのはそのためです。オペラ第2幕のラストシーンは、この「リュトリの誓い」がモデルになっています。こうして作られたスイス盟約者団には1353年までに5つの州が加わり、度重なるハプスブルク家との衝突に勝利したスイスは15世紀末に事実上の独立を果たしました。

「建国の英雄」ウィリアム・テルの存在を証明する史料は残されていません。彼の伝説が語

られるようになったのは15世紀以降で、今日では架空の人物であると結論付けられています。ドイツを代表する作家のゲーテはスイス旅行中にこの伝説を知ると、親友のシラーにアイデアを譲り、戯曲を書くよう勧めました。シラーの戯曲、そしてロッシーニのオペラによってスイス独立の物語は世界に広まり、その人気は健在です。テルといわれる人物の肖像や、矢の突き刺さったリングのモチーフは、20世紀のスイスの硬貨や紙幣に描かれ、テルは今もスイスで愛され続けています。



DOPO
L'OPERA

オペラのあとで

本作品は、規模の大きさから上演機会が限られますが、よく知られる序曲以外にも魅力の詰まった作品です。ロッシーニは『ウィリアム・テル』をオペラ化するにあたり、シラーの戯曲にいくつか変更を加えました。変更点の最たるものが、サイドストーリーとして重要な役割を果たすマティルドとアルノールの恋模様です。戯曲の恋愛要素は添える程度で、この2人のキャラクター自体登場しません。

『ロミオとジュリエット』に代表されるような、敵対する国や家の男女が恋に落ちる構図はオペラの鉄板ネタです。リングを射抜く場面でのテルのアリアの他に、マティルドとアルノールにもそれぞれ美しく難易度の高いアリアが用意されています。また、序曲の三つ目のパートで演奏されるスイスの伝統的な牛追い唄（ラン・デ・ヴァッシュ）の印象的な旋律が、オペラに温かみをもたらしています。素朴で穏やかなスイス民族音楽のフレーズは、本編でも形を変えながら複数回登場します。ラストシーンでは、スイスの自然の美しさを讃える抒情的な合唱がオペラを締めくくります。

